



文理融合
シンポジウム
一般講演会

十一月三日 金祝

無料オンライン

宝永四ツ宝丁銀（国立歴史民俗博物館蔵）
銀が20%しか含まれていない低品位の丁銀。
現存数が少ない

（このう）
虎面 殿後期（前11世紀）（泉屋博物館蔵）
後肢で立つ虎が人を抱え、丸のみにするか
のような不思議な造形を表す器

文理融合シンポジウム一般講演会

量子ビームで歴史を探る

ー加速器が紡ぐ文理融合の地平ー

丁銀の本身は純銀なのか？それを調べるために貴重な丁銀を切断するわけにはいきません。実はミュオンやX線などの量子ビームを用いることで、壊さずに文化財の内部を調べることができます。ミュオンとは何か。ミュオンビームやX線CTにはどのような特徴があるのか。どんな原理で文化財の内部を調べることができるのか。ミュオンビームで丁銀を、X線CTで中国古代青銅器を調べることので何が分かったのかを、最先端の研究者がわかりやすくお話しいたします。

講演者



ミュオンで視る
三宅康博 名誉教授
（高エネルギー加速器研究機構）



江戸時代の小判と丁銀に施された
表面処理技術の変遷と系譜
齋藤努 教授（国立歴史民俗博物館）



中国古代青銅器の科学調査
廣川守 館長（泉屋博物館）

日時 11月3日（金・祝）午後1時30分～3時55分

場所 オンライン

参加料 無料。事前申し込みが必要です

定員 450名

お申込み Webサイトをご覧ください

<https://www2.kek.jp/jms/evnt/2023/11/031330.html>